

鵜沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 2 3 号

〈歴史散歩〉 史跡めぐり — 遊行寺	1
『徳川家康の祖先と遊行寺の縁』	小池 清志…12
〈事業報告〉 鵜沼の玉石垣	玉石垣プロジェクトチーム…14
玉石垣プロジェクトについて	31
石垣に利用されている玉石調べ	平塚市博物館…32
Coffee Break	36
〈事業報告〉 「鵜沼の玉石垣」を公民館まつりで展示	38
〈チョッと見てみよう〉	
鵜沼にふたつある「松が岡公園」	有田 裕一…40
創立30周年記念樹の植替え	43
— あれから100年 —	44
『鵜沼雑記』(七)	古志 秋彦…45
〈鵜沼を巡る千一話より〉	
鵜沼地区の通称地名	渡部 瞭…51
活動の記録(令和4年12月～令和5年11月)	58
編集後記	62

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵜沼村久久比奴末牟良」
とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる

鵜沼を語る会 発行

史跡めぐりー遊行寺

昨年2月の「史跡めぐりー龍口寺」に続き、今年の歴史散歩は4月例会日(2023年4月11日)を充て、遊行寺めぐりを14名の参加者を得て行った。

当日は晴れ、風も穏やかで歴史散歩にはこの上もない天気。午前10時に小田急線・藤沢駅改札口に集合、バスで遊行寺に向かった。現地に直接来た会員もあり、遊行寺のシンボル・大銀杏のもとに10時半過ぎには参加者全員が集まった。駐車場わきの八重桜が満開。今回も企画からガイド役まで小池清志会員が引き受けてくれた。引率役を田中雄一・大川久・吉永昭男会員にお願いした。

スタートは敵御方供養塔。その後、本堂脇の緩い車坂(通称)を上がり、小栗判官・照手姫の墓がある長生院裏庭に向かう。緑いっぱいのスペースにあり、アゲハチョウがひとつ舞っていた。来た道を戻り時宗を開いた一遍上人像の前で一遍さんについての説明を受け、本堂を背に記念撮影。階段をのぼり左手の木戸から本堂内に入り、拝観した。本尊の阿弥陀如来坐像の輝きが印象的だった。

一遍上人は全国を遊行し生涯、寺を建てなかった。遊行寺の名称で親しまれているこの寺の正式名称は「藤澤山(とうたくさん)無量光院清浄光寺」で、1325年、遊行四代吞海上人により開山された。

本堂を辞し鐘楼へ。「延文の鐘」といわれ南北朝時代、1356(延文元)年に造られている。本堂左奥に宇賀神社があるが、周辺が長期間の工事で立入禁止だった。南部右馬頭茂時の墓をみてから、遊行寺内では現存する一番古い建物「中雀門」へ。この門には皇室の菊の紋章や徳川家の三つ葉葵が見られる。

最後に訪れたのは大書院。玄関前の庭園には牡丹の花が見頃で気持ちが和む。大書院に続く廊下に面していくつもの部屋があり、中庭は季節が来れば菖蒲畑として目を楽しませてくれるだろう。
(文・写真：竹内 広弥)





緑に包まれた小栗判官・照手姫の墓



遊行寺内で最古の建物・中雀門



南北朝時代に造られた延文の鐘



大書院・小書院の庭



歴史散歩 春の史跡めぐり 遊行寺に参加して

■心配されていた天気も問題なく青空に、いろは坂の満開の八重桜、芽吹いたばかりの若葉が眩しい大銀杏の霊木の下に集合。何度も台風の被害を受け痛々しい姿ですが樹齢七百年の立ち姿は雄々しいものです。

小学生の頃、大風の翌日、放課後掃除用のブリキのバケツを持ってギンナンを拾いに来ました。又、この頃だと記憶していますが、この広い境内に大きなテントを張りサーカスの興行が開かれ、父に手をひかれて見物に来たのを思い出します。さて、企画から資料作成そしてガイドまで担当した小池会員が配付した"遊行寺の史跡めぐり"の資料を片手に、すっかり修学旅行の学生気分になり、私は引率役であることも忘れ先生の名ガイドに聞き入ってしまいました。コロナ禍のためか参拝客はほとんど無く、ゆっくり見学することができました。

恥ずかしいことですが藤沢市のランドマーク的存在であるのに全くの無知でした。野外文化財がこんなに沢山登録、指定されているとは知りませんでした。

小池先生の性格そのままの緻密な準備の上にでき上がった分かり易いガイド、皆さまいよいよゴールです。何事もなくゴール出来ましたことを感謝して一礼。

満開の八重桜がいろは坂を引きあげる我々を見送っていました。（吉永 昭男）

■去年は龍口寺、今回は遊行寺と近くの寺社をゆっくり訪ねることが出来た。遊行寺も何回か訪れていたが、惣門をくぐり、いろは坂から大銀杏へ、そして本堂で手を合わせお参りし、時には小栗判官、照手姫の墓までという参拝だった。今回は更に放生池、太鼓堂など、そして信徒会館の方も見せていただいた。

ここで突然七十年程前のことが走馬灯の様に駆けめぐって来た。戦後十年程たち、やっと落ち着いてきた頃、合唱好きの学生達を中心となった「湘南市民コール」という合唱団が産声をあげた。皆若くて元気、歌ったり、時にはハイキングに行ったり、戦後の大変な時代を乗り越えていったと思う。ある時、藤沢公民館の練習場に近づいた時、素晴らしい男声合唱の響きが聞こえてきた。そっと近づいてみると「早稲田大学コール・フリーゲル」が練習しているところだった。当時、皆は遊行寺で合宿し、練習には近くの藤沢公民館を利用していた由、そこで初めて合唱の素晴らしさと、指揮者・関屋晋先生を知ることとなった。その後、関屋先生は「湘南市民コール」の常任指揮者として演奏会、コンクール、更には海外での演奏会と歌声を響かせて下さったことなど、信徒会館を見せていただきながら遠い日々のことを思い出すことが出来た貴重な一日となった。

（佐藤 和子）

■一遍上人に帰依している私にとって、遊行寺は”聖地”です。（十代田 知三）

■私と遊行寺の繋がり、あの夕暮れ時のゆらめくかがり火の向こうに展開される薪能、そしてお上人様の朗々としたご挨拶、遊行の盆、高野先生のセミナー、小栗判官・照手姫の劇などである。

延期の末、やっと実現したこの見学。素晴らしい天気恵まれ、もちろん名ガイド小池会員つきである。

中雀門に足を踏み入れると、なんと極楽浄土では？と錯覚を起しそうな素晴らしい花々が咲き誇り青空に映えている。写真を撮り大満足。

教科書では、一遍上人の踊り念仏、遊行寺とお上人のすごいところは、寺を建てず、我が屍は野の獣たちに与えよと遺言。小池ガイドの力が入る。

4代目吞海上人と俣野そして清浄光寺など記憶力0の私にもまた少し記憶がプラスされた。駅との健康のためのウォーキングを含めて疲れを忘れるような素晴らしい一日でした。

南無阿弥陀仏、私の悩み多き人生、南無阿弥陀仏。（刀根 恵子）

■藤沢橋から北に向って坂を上った処に「遊行寺坂上」という交通標識がある。鵜沼に住むようになって直ぐのころ、僕は「ゆうこうじさかうえ」と読んで「ゆぎょうじさかうえ」と読むのだと地元の人に笑われ、恥ずかしい思いをした。

僕は仏教に係わりの多い育ち方をした方だと思う。家の宗旨は浄土真宗、幼稚園も中学高校も仏教系で、学園長は増上寺管長の椎尾弁匡大僧正であった。

大学で建築を学び社寺建築、仏教彫刻に興味湧き夏休みには毎年、奈良・京都の寺院を巡った。六波羅蜜寺の「空也上人立像」は特に印象深く、口から6体の阿弥陀仏が出て念仏を可視化するアイデアに驚いた。

迂闊なことに、その空也上人の念仏行の理念を300年後に受け継いだのが一遍の「遊行」と知ったのは遊行寺を「ゆぎょうじ」と読めるようになってからである。

今回の遊行寺見学での小池会員の丁寧な解説は、僕の断片的で偏った知識を正統的な秩序だったものに改めて下さった。まことに有難い。

また当日は、好天のうえ温暖。八重桜、牡丹が満開で大イチョウの若葉の緑と実によい気持ちであった。（岡田 哲明）

■満開の八重桜のトンネルを通り大銀杏の下で勢揃い、小池会員の名ガイドで史跡めぐりが始まる。

遊行寺と言えば、一遍上人がひらいた時宗の総本山と記憶していたが、一遍上人は、お寺を建てておらず、開山は、遊行4代目吞海上人で、正式には藤澤山（とうたくさん）無量光院清浄光寺とのこと。帰りに惣門の左側に明記されていることを確認した。歴史的な由来も、はっきりしており、釈迦の仏法の浄土宗系の一派のようです。

これらの歴史を資料配付の上、例の名調子で詳しくガイドされたことに感心する。続いて、敵御方供養塔、小栗判官・照手姫の墓、一遍上人像、大本堂と見学。大本堂では中に入り詳しいガイド。鐘楼、中雀門、ぼたん園、信徒会館から一般では入れない大書院へ。大書院には明治天皇一行も泊られた由。中庭の菖蒲園には菖蒲がきれいに植えられていた。いずれにしても普通では入れない。遊行寺の大伽藍を詳しくガイド、見学させていただいたことを感謝します。

当日は、快晴小春日和で。八重桜、ツツジ、ぼたん、などの春の花が満開見頃、行く先々でガイドされた小池会員、ツアーのリーダー役の田中会員他に感謝、御礼を申し上げます。
(西村 望)

■4月11日、延び延びになっていた遊行寺の参観が実現した。好天に恵まれ、八重桜が満開で木々の青葉が風に揺らいで実にいい気持ちで境内を歩くことができた。遊行寺坂が始まるバス停から境内に入ったが、古い旅館があり、箱根駅伝の時は大勢の人が泊まる有名な旅館らしい。遊行寺は東海道の宿場沿いの有名な寺であるが、今回のように詳しく見たのは初めてであった。小栗判官、照手姫の物語でも有名である（市川猿之助のスーパー歌舞伎オグリを見たが、今回の事件で彼の演技が見られなくなったのは残念である）。一遍上人像、御本堂、中雀門などを巡り、大書院の中まで見学することができた。実際に歩いてみるとかなり広く、奥行きのある境内だと想った。大書院に菖蒲園があり、満開の時は素晴らしい庭園になるだろうと想像された。

宝物館は土日だけの開館だったので見学できなかったが機会をみて国宝の一遍上人絵図を見てみたい。相当な色黒の人であったようだ。それにしても鎌倉期というのはいくつかの新興宗教興り、庶民に踊り念仏などが受け入れられたことは、それだけ社会不安も大きかったに違いない。今回も小池会員の詳しい解説で遊行寺をよく理解できた。
(大川 久)

■昨年の「龍口寺」に続き 4 月 11 日に「遊行寺（清浄光寺）」の史跡巡りが開催されました。私は世話役として参加申込み受付から当日の引率役までしました。当初の申込は 17 名でしたが、3 名が体調不良等により参加できず最終的には 14 名となりました。当日は三々五々に大銀杏の前に集合し、前回と同じく小池会員の名ガイドのもと、地元にながら知らなかった遊行寺の歴史を改めて学ぶことができました。

まず、境内の右手にある国指定重要史跡の敵御方供養塔を見学。その後、本堂の裏手にある小栗判官と照手姫の墓に手を合わせ、これも登録有形文化財の本堂に戻って参拝しました。遊行寺の開山は 1325(正中 2)年に俣野氏の一族である 4 代吞海上人ですが、時宗総本山であるため、宗祖である一遍上人が開基したものである方も多いが、そうではなかったことを再認識しました。

また、寺内には鐘楼、惣門、宇賀神社、中雀門など登録有形文化財の建造物が多数あるのには驚嘆しました。(田中 雄一)

拝観順路

①大銀杏⇒②敵御方供養塔⇒③小栗判官・照手姫の墓⇒④一遍上人像⇒⑤大本堂⇒⑥延文の鐘⇒⑦南部右馬頭茂時の墓⇒⑧中雀門⇒⑨大書院⇒大銀杏(解散)



遊行寺 HP より

遊行寺

時宗の歴史

時宗を開いた一遍上人（1239～1289）は平安中期の浄土教を開いた空也上人を尊敬していたし、また平安末期浄土宗を開いた法然上人も尊敬していた。浄土真宗も含めてそれらに共通する信仰は「南無阿弥陀仏」を唱えて、阿弥陀如来に救ってもらう「他力本願」の宗教である。

一遍さんが悟りを開いたのは1274年、紀伊の熊野権現に参詣した折といわれ、神様のお導きによって開宗したというのが他の教祖様たちと違うところ。

時宗の特色は三つあげられる。その第一が遊行上人とその弟子たちが全国を布教して歩く遊行回国。第二に踊り念仏。踊り念仏は盆踊りの起源になったと伝えられている。難しいお経を踊りながら唱えるという念仏が易行であったため、庶民に受け入れられた。第三が「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と書かれた念佛札を配ること、それを賦算といった。

一遍上人のすごいところは、生涯お寺を建てなかったこと。なぜなら「一所不住」といって、全国を遊行して死ぬまで定住しなかったからで、しかも死に際して「わが屍は野の獣たちに与えよ」と遺言した。このように言った教祖は他にいない。

教団の結成

一遍が亡くなると信者たちは一人消え二人消えしてバラバラになってしまった。二祖の真教はその欠点を克服するため、信者たちの拠り所として、地域ごとに寺院（道場）を建設し、修行の場や信者の紐帯の場所にした。

真教は1304年68歳で遊行3代を智得に譲り、当麻（相模原市）に無量光寺を建立し*独住した。（*遊行をやめて一所に定住すること、隠居寺）

清浄光寺（遊行寺）と吞海上人

遊行4代目吞海上人（1265年～1327年）は、東俣野（現横浜市戸塚区）・西俣野（現藤沢市）を領地とする鎌倉幕府御家人の俣野景平の一族である。出家は1295年吞海31歳の時、兄景平のすすめにより、二祖真教に弟子入りし以後、真教に随従して回国の旅をつづけたようである。1301年仏師運慶の三男康弁が京都七条の土地を時宗に寄進すると、真教は吞海に命じて道場（寺）を創建せしめた。それが金光寺であり、吞海は開山第一世となった。1319年吞海は55歳で遊行4代を継承した。

1325年吞海61歳で、安国に遊行5代を譲り、自らは当麻の無量光寺に独住しようとしたところ、幕府の有力者北条氏一族の大仏貞直のバックアップを受

けた内阿（うちあ）真光の策謀により、無量光寺へ入ることを阻まれた。

やむなく呑海は実家の俣野に帰住した。そこで兄俣野五郎景平は弟のために藤沢道場（清浄光寺）を建設した。呑海は開山に迎えられ以後、代々清浄光寺は独住の寺（隠居寺）となり、その住職は藤沢上人と呼ばれた。

1327 年、呑海は清浄光寺にて入滅、享年 63 歳であった。

今日藤沢市民一般に、「遊行寺」の名称で親しまれているが、正式名称は「藤澤山（とうたくさん）無量光院清浄光寺」である。

大本堂

関東大震災で倒壊したのち、1935（昭和 10）年上棟、1937 年に落成した。木造としては東海道有数の大堂だ。本尊は阿弥陀如来坐像で高さ 6 尺 1 寸、古くは浅草の浅草寺にあったものが、浅草日輪寺が譲り受け、さらに 1737 年本山の本堂に安置されるのがふさわしいとして遊行寺に遷座されたものである。



大震災で倒壊後、再建された本堂

本堂厨子配置図



42 代尊任



2 祖真教



一遍立像



4 代呑海坐像

長生院（ちょうしょういん）



鬼鹿毛の墓



照手姫の墓



小栗判官の墓

時は応永のころ(1394 年～1428 年)、常陸国真壁郡(現筑西市)に小栗判官満重という武将がおって、第4代鎌倉公方足利持氏に対し、謀反を企てた。



公方持氏は大軍で小栗城を囲んだので、満重の城は落城し、ひそかに主従 11 騎は三河を目指して落ち延びる途中、

照手姫と小栗判官の墓は長生院裏手にある

相模藤沢の横山大膳の宿へ泊った。大膳は強盗殺人を業とする大悪党だった。小栗判官に毒入りの酒を飲ませ殺そうと図った。

この酒席に侍った純情な遊女に照手姫がいた。照手姫は大膳によって美濃国青墓の宿の遊女に売られ、満重は毒酒によりめくら・いざりとなり東海道をいざり車に引かれて、紀州熊野本宮大社に詣で、湯の峰温泉に浸かると毒は消されて全快した。満重は故郷常陸に帰る途次、藤沢の横山大膳を絡め捕り、盗賊を征伐した。照手姫を美濃青墓の宿から救い出し、照手姫は尼となって長生院(ちょうしょういん)に入り、余生を送ったという伝説である。

宇賀神社

神話に出てくる、とぐろを巻く蛇身人面の翁である。財産をなす商売の神様ともいわれている。鎌倉の葛原岡にある銭洗弁財天・宇賀福神社が有名であるが、それと同系統の神様である。

南部右馬頭茂時の墓

南部茂時は鎌倉幕府滅亡時、北条高時に仕えていた武士である。南部氏は甲斐源氏の家系を引く。加賀美遠光の三男光行を祖として、甲斐国が駿河と国境を接する最南部の出身で、北条氏の地頭として、陸奥糠部郡(ぬかのぶぐん)(現岩手県北部から青森県東部)に入部したものと考えられている。のちの江戸時代、南部盛岡藩の先祖と考えられる。

延文の鐘

この鐘は南北朝時代、1356(延文元・正平 11)年に造られている。当時の遊行寺の住職は遊行 8 代その他阿渡船である。この上人は遊行上して初めて佐渡

へ渡って念仏勧進された上人である。その年に藤沢遊行寺独住されて、本堂を造営し寺観を整備した6代一鎮が入寂されたので、渡船は藤沢遊行寺に入ると寺観の総仕上げとして梵鐘の鑄造を行ったものである。鑄工は大和権守光連で、鎌倉地方で栄えた鑄物師物部氏の一族である。

戦国時代、伊勢長氏（北条早雲）と三浦義同（よしあつ、道寸）との合戦で、1513年遊行寺は焼き払われ、この鐘も小田原へ持ち去られ、それから江戸時代1607年遊行32代他阿普光が遊行寺の再建を完成して取り戻すまで、よそに持ち去られたままであった。

中雀門

中雀門は柱4本の四脚門で、唐破風が正面向きの向唐門で、屋根は銅板でふかれ、皇室の菊のご紋章が鬼瓦や屋根の棟破風などにみられる。そのいわれは遊行12代尊観上人が後醍醐天皇のいとこで亀山天皇の皇子恒明親王の子息と言われたことによる、南朝系の皇族とされたことによる。徳川家の「三つ葉葵」の紋章も屋根の下り棟、鬼瓦などにみられる。中雀門が建立されたのは、1859（安政6）年で、現存する遊行寺内では一番古い建物である。

敵御方（てきみかた）供養塔

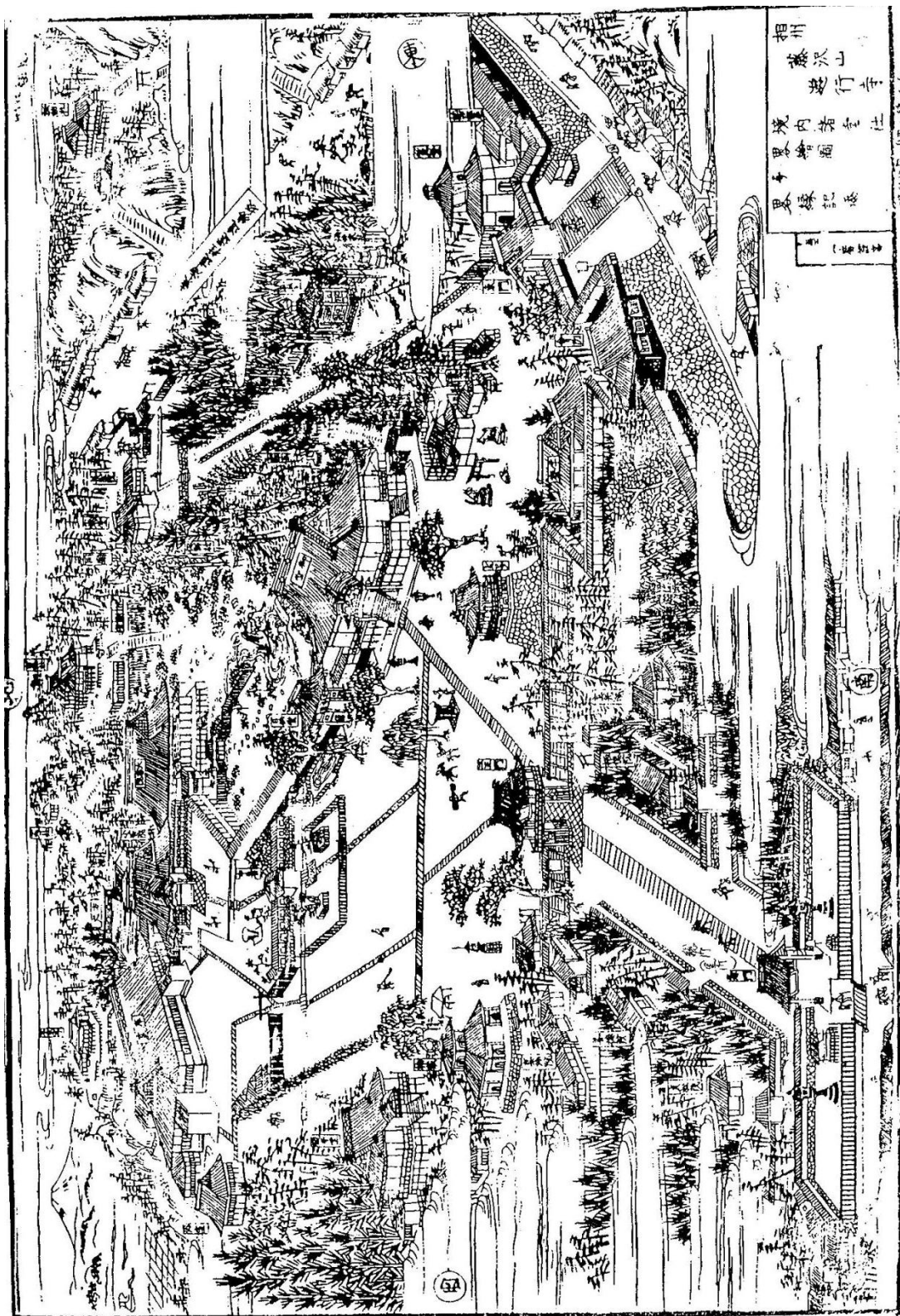
遊行寺の東口を入ると左側に一基の石碑がある。国の重要史跡に指定されており、「怨親（おんじん）平等碑」とも呼ばれ、1926（大正15）年10月、国の史跡に指定されている。この供養塔は塔身の高さ125cmの角塔婆（かくとうば）で、方形の台石上に建っている。造立者は遊行14代他阿太空である。

室町時代ははじめの応永23（1416）年、上杉氏憲（禅秀、犬懸上杉氏）が、鎌倉公方足利持氏に対して反乱を起こした。この時、京都の幕府は將軍義持が鎌倉公方持氏を支援したため氏憲は敗れた。

太空上人は敵、味方の分け隔てなく、皆ことごとく極楽往生するようこの石碑を建てたものである。

<遊行寺めぐり配付資料>

むかしの遊行寺



『徳川家康の祖先と遊行寺との^{えにし}縁』

小池 清志(会員)

4月11日の史跡めぐりは、私の拙ないご案内で、さぞお耳汚しだった事と存じます。当日は皆様のお陰で天候に恵まれました。陽射しを浴びた牡丹の美しさに思わずウットリしました。

さて当日の記録は、新代表竹内広弥さんに書いていただきましたので、私は「徳川家と遊行寺との馴れ初め」について触れたいと思います。

江戸時代、時宗は將軍家から特別待遇を受けました。それはお上人様の遊行回国の際、大名並みの待遇を受けたことです。徳川家康は遊行上人が遊行する際、行く先々の宿場では、50頭の馬と50人の馬子を用立てるよう命令を出しました。宗教界でこのような待遇を受けた宗派は他にありません。なぜその様な特別待遇を受けられたのでしょうか？

それは家康のご先祖さんが、遊行寺に命を救ってもらった過去があるからです。徳川家の系図を繙くと、祖先は清和源氏の**新田義貞**に行きつくと言われています（系図は家康の創作とされる説もあります）。この新田諸族の中に世良田(せらた)得川(とくがわ)氏の一流があります。



敵御方供養塔

話変わって、遊行寺の史跡めぐりの際、一番初めに訪れた「**敵御方**（てきみかた）**供養塔**」または「**怨親**（おんじん）**平等碑**」ともいわれる石碑を覚えておいででしょうか？

時は室町時代、15世紀前半、「**上杉禅秀の乱**」といって、鎌倉府 No.1 の公方（くぼう）**足利持氏**と No.2 の関東管領（かんれい）**上杉禅秀**とが仲違いして合戦になりました。その結果、両軍の多くの戦死者の亡魂を弔うために、1418（応永25）年、第14代遊行**太空中人**が建てたのがこの石碑です。

この乱の時、上杉禅秀の勧誘を受けて、

足利持氏討伐に立ち上がったのが、新田一族の**世良田得川氏の有親**（ありちか）・**親氏**父子でした（足利尊氏・新田義貞以来両家は宿命の対立関係にあった）。しかし敗れて、残党狩りの追求が厳しくなったので、父子は**遊行寺へ逃げ込み、太空中人に弟子入り出家して、一命を取り留**



遊行寺境内で最も古い建造物 中雀門

めました。それは当時遊行寺が治外法権でありアジールであることを物語ります。

やがて**“徳阿弥”**と名乗った息子の方の**親氏**（ちかうじ）は、遊行回国の旅に出て三河国にやって来ました。現代のトヨタ自動車のある豊田市の辺りは**松平郷**といわれ、土豪の松平氏が支配していましたが、夫を亡くしたばかりの女領主でした。徳阿弥はこの家に暫らく逗留しましたが、女領主に気に入られて入り婿しました。還俗して**松平太郎左衛門親氏**（ちかうじ）と名乗りました。

徳川家康自身は親氏（ちかうじ）が徳川家（松平氏）の開祖に当たると言っています。（この系図に異を唱える学者もいます）

家康が松平から徳川に改姓したのは彼自身が**源氏の血をひく得川氏出身であり**、「とく」の字には**親氏の法号“徳阿弥”の「徳」**の字をあて、家柄の良さを強調したものです。

以上の事柄から、徳川家康は**遊行寺**を、ご先祖様の**命の恩人**として、**報恩**したのでした。

（こいけ きよし）

中雀門は安政六年（1859）に建立された遊行寺境内で最も古い建造物。大棟に皇室との深いつながりを示す菊の御紋、屋根の下に**徳川家の家紋である葵の御紋**が刻まれている。建立者は紀伊大納言徳川治宝（とくがわはるとみ）とある。

鵜沼の玉石垣

鵜沼松が岡三丁目あたりの路地に入ると、黒松と玉石垣が
織りなす昔ながらの風情を遺す景観が楽しめる



これまで永いこと鵜沼に住んでいるが、玉石垣のことはあまり気にならなかった。昔からある当たり前の景色であったからだろう。

ところが近年、宅地の細分化が進み玉石垣が取り壊されている姿が目につき始めた。藤沢市は、わがまちふじさわ景観ベストテンに「松と玉石垣のまち並み 鵜沼」を選んでいるが、昔ながらの鵜沼の景観は減りつつある。

こうした状況を残念に思うとともに、なぜ鵜沼の街並みには玉石垣が多いのかと思い、鵜沼を語る会では実態を調べてみようということになった。

鵜沼は明治の時代に別荘地として大規模な開発が始まり、黒松が植えられ、風格ある邸宅が建てられた。

鵜沼の地形をみるといくつか砂丘がある。砂丘に設ける垣根として砂留の役目もする玉石を使い、別荘地の土地区分として黒松を植え玉石垣を設けたのが始まりではないかといわれているが定かではない。鵜沼の玉石垣はいつ頃からつくられ、使われた玉石はどこから運ばれてきたのか、いろいろ疑問が生じる。

これらを知る術はないが、昔の鵜沼を描いた二点の絵がある。一点は関東大震災まで鵜沼に在住していた画家の岸田劉生が「初夏の麦畑と石垣」を描いている。白っぽいあるいは青味がかかった石が積み重なっている。もう一点は劉生の弟子の椿貞雄が描いた「鵜沼の或る道」。この二点の絵は共に震災以前の1920年の作品で、昔の鵜沼の玉石垣の様子を伝える数少ない貴重な資料である。

大正時代の鵜沼風景



初夏の麦畑と石垣 岸田 劉生 1920 年



鵜沼の或る道 椿 貞雄 1920 年

玉石垣を調べる

■ 鵜沼地区の玉石垣を調べるにあたって、まず北部の鵜沼神明から南部の鵜沼海岸まで全体の玉石垣の状況を見た。鵜沼神明は3丁目の万福寺あたりにいくつか見られた。藤沢駅南部の鵜沼花沢町、鵜沼東、鵜沼石上1丁目は開発が進んでおりマンションや商業ビルなどが建ち、また石上2、3丁目も数少ない。

■ 今回掲載した玉石垣の写真は、調べた中で多く見られた6ヵ所— 鵜沼橘、鵜沼桜が岡、鵜沼藤が谷、鵜沼松が岡、鵜沼海岸、本鵜沼の写真の主として選んだ。玉石は数段積みで垣根の土台となっているのがほとんどだが、砂丘地帯の家屋には高く積み上げられ砂留の役をしているものもある。玉石は河原や海岸の石で直径20cmほどの角が取れている丸い石を指す。

今回の鵜沼の玉石垣の調査に当たり、なにか参考になる資料はないか探したが藤沢市には博物館はなく見つからなかった。

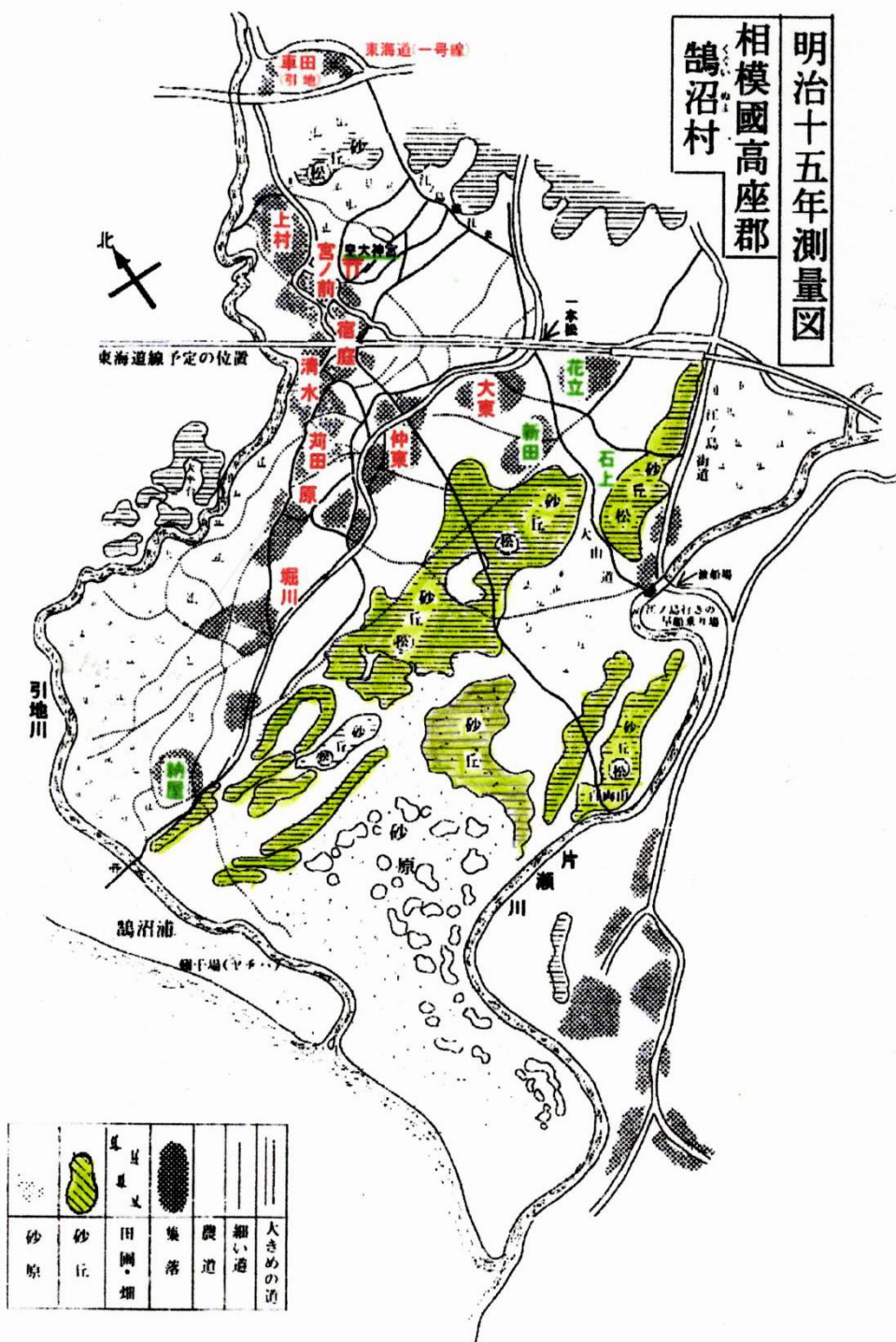
■ 藤沢市の砂丘列は、最北部・中間部・最南部の3帯に分けられ、最北部と最南部は海岸線と平行する。しかし、中間部の砂丘列は、辻堂付近では東北東—西南西方向、鵜沼中央部では北東—南西方向、鵜沼東部では北北東—南南西方向、片瀬では南北方向と、東に行くに従って海岸線とは直交するような角度をもつに至る。そしていずれも北側の標高が高い。

鵜沼における砂丘列の方向は、道路網のみならず、鉄道、地割り、畝立て、家屋の向きなど、あらゆる地上物の方向に影響する。藤が谷、橘、桜が岡、松が岡の地形にはこれら砂丘があり玉石垣が多いことに関連性があるのではないと思われる。

■ 近隣の平塚市博物館が玉石垣について調べていることを聞き、7月上旬に同博物館を訪ね、野崎篤学芸員から玉石について説明を受けた。館内には玉石垣のコーナーが設けられ、玉石の産地別に造られた玉石垣が展示されている。同博物館では平塚市内の玉石垣1,700ヵ所を調べたところ、酒匂川系41%、その上流の河内川系18%、水無川系16%、金目川系2%、相模川系4%、県外の富士川系13%、富士箱根系6%となっている（平塚市博物館資料 p32-35 参照）

■ 9月例会に野崎学芸員を招き、鵜沼公民館近くの玉石垣を観察した。短時間で場所も限られていたので詳しくは調べられなかったが、玉石垣の多くは古く、相模川系もしくは酒匂川系の玉石が使われているようだ。中には新しい玉石垣もあり富士川系の玉石がみられる。県では河川での石の採取が昭和39年に禁止され、その後は富士川系の玉石が使われるようになった。

鵜沼の砂丘





鵜沼橋

橋通りを境に東側が1丁目、西側が2丁目。1丁目北側は鵜沼石上1丁目同様、藤沢駅南口の商業地区となり対象外。

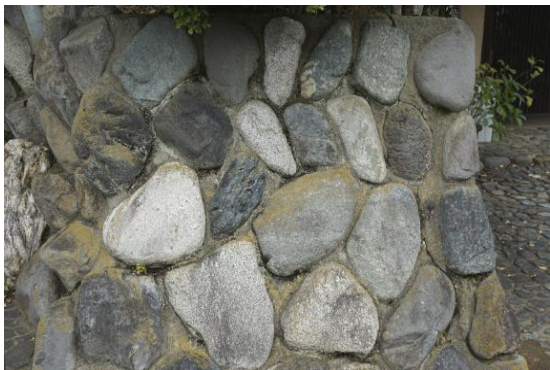
江ノ電バス停・橋通り辺りから南には玉石垣が多くみられる。

2丁目の北境は鵜沼花沢町と接し、まだ住宅街で何か所か玉石垣がある。2丁目は砂丘になっており玉石垣が多くみられる。

最近、大きな敷地の家屋が撤去され、使われていた玉石が山積みされていた。

鵜沼橋 1 丁目

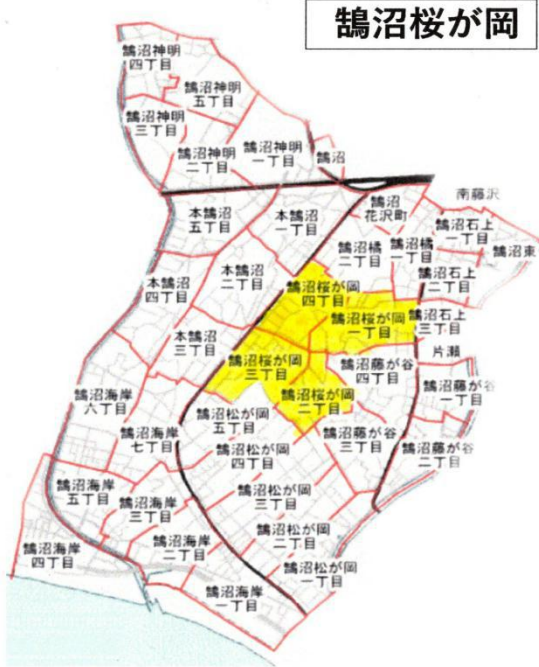




鵜沼橋 2 丁目



鵜沼桜が岡



1丁目は蓮池の北側、東側は江ノ電に接しており東西に長い。西境は江ノ電バスが走る高瀬通りに面し、ところどころに玉石垣がみられる。蓮池方向に行くと、小規模ながらも玉石垣がみられる。

バス通り西側の4丁目は砂丘地帯で、大規模な玉石垣が多数みられる。玉石垣をみるには適した場所である。

2丁目、3丁目は建て替えもあるが何か所かみられる。

鵜沼桜が岡 1丁目



鵜沼桜が岡 2丁目



鵜沼桜が岡 3、4 丁目





江ノ電の柳小路駅から鵜沼駅までの線路を挟んだ地域で、東側は境川に接する。砂丘地帯なので高台に家が建てられ、周囲を玉石垣で囲っているところが多い。2、3丁目には別荘地や宅地として分譲された古い家々が多く残り、江ノ電沿いの路は玉石垣撮影のスポットとなっている。

明治時代に開通した江ノ電の線路は藤が谷の砂丘を削って敷かれた。

鵜沼藤が谷 2 丁目

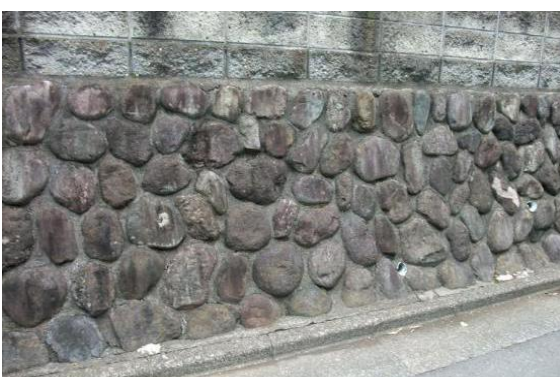


鵜沼藤が谷 3 丁目





賀来神社



松が沼鵜

Map of Matsuyama City, Ehime Prefecture, Japan, showing various districts and their corresponding postal codes.

- 鷺沼神明 (四丁目)
- 鷺沼神明 (五丁目)
- 鷺沼神明 (三丁目)
- 鷺沼神明 (二丁目)
- 鷺沼 (一丁目)
- 本鷺沼 (五丁目)
- 本鷺沼 (一丁目)
- 鷺沼花沢町
- 鷺沼石上 (一丁目)
- 鷺沼東
- 鷺沼橋 (二丁目)
- 鷺沼橋 (一丁目)
- 鷺沼石上 (二丁目)
- 鷺沼石上 (三丁目)
- 片瀬
- 鷺沼藤が谷 (一丁目)
- 鷺沼藤が谷 (二丁目)
- 鷺沼藤が谷 (三丁目)
- 鷺沼藤が谷 (四丁目)
- 鷺沼松が岡 (五丁目)
- 鷺沼松が岡 (四丁目)
- 鷺沼松が岡 (三丁目)
- 鷺沼松が岡 (二丁目)
- 鷺沼松が岡 (一丁目)
- 鷺沼海岸 (六丁目)
- 鷺沼海岸 (七丁目)
- 鷺沼海岸 (五丁目)
- 鷺沼海岸 (三丁目)
- 鷺沼海岸 (二丁目)
- 鷺沼海岸 (一丁目)
- 鷺沼海岸 (四丁目)

鵜沼松が岡 1 丁目、2 丁目

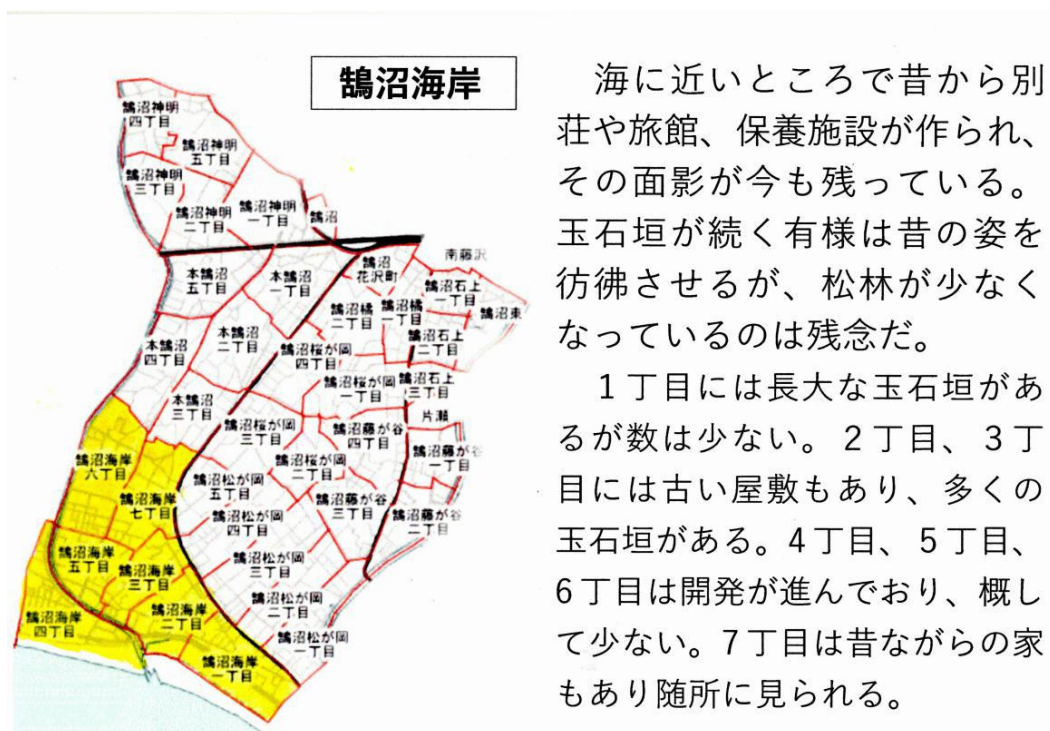


鵜沼松が岡 3 丁目



鵜沼松が岡 4、5 丁目





鵜沼海岸 1、2丁目





鵜沼海岸 5、7 丁目





本鵜沼

1丁目の北側は東海道線に接しマンションが建っている。2丁目、3丁目は一部開発されているが、いくつか旧家があり広い敷地は玉石垣で囲われている。5丁目は一部開発されているが4丁目は随所にみられる。

3丁目のある家屋の玉石垣をみていると家主さんが出てきて「これらの玉石は60年以上前に中川温泉近くの川(酒匂川上流＝河内川)から業者と一緒に持ってきました」と話していた。

本鵜沼 2丁目



本鵜沼 3、4 丁目



60 年以上前に西丹沢・中川温泉あたりの川(酒匂川上流河内川) から採取した玉石で作った玉石垣 (家主談)



玉石の門柱



開発・建て替えで消えゆく玉石垣



古い作りの大きな家屋が取り壊され、玉石垣も崩され玉石が山積みされている



玉石垣を調べているうちに、建て替えのために玉石垣の一部が消えた



家屋はないが門と玉石垣は残されている



空き地に玉石垣だけが残っている



古い玉石垣に新しく玉石垣が繋がれた。型枠を使いコンクリートで仕上げた垣根。神奈川県では昭和 39 年以降、河川での採石が禁止

玉石垣プロジェクトについて

■ 鶴沼の玉石垣について話し始めたのは、昨年秋ごろのことであった。大川久会員が朝の犬の散歩の折り、分譲地化や建て替えて玉石垣が壊されてゆくのを何度も見ていて、何とか残せないものかという想いになっていた。

このことを例会で話したことが切っ掛けとなり、佐藤和子会員からも同じ想いが語られ、皆の玉石垣への関心が高まった。

鶴沼の玉石垣の玉石はどこから運ばれてきたのか、いつ頃から造られ始めたのか、なぜ玉石が使われたのか、皆もそのような疑問を持っていた。話としてはこうらしい、という程度で確たる資料はない。



野崎学芸員と一緒に玉石垣観察

■ 調べ始めてみると、わがまちふじさわ景観ベストテンに「松と玉石垣のまち並み 鶴沼」が選ばれていることが分かった。早速、藤沢市発行の『景観ベストテン・ガイドブック』を購入、5月の総会で今年度の事業計画に取り上げた。大川久会員をリーダーに、玉石垣プロジェクトを立ち上げメンバーを募った。今年10月の鶴沼地区公民館まつりで玉石垣について調べたことを展示し、併せて会誌『鶴沼』123号に掲載することを決めた。

■ まず取り組んだことは、鶴沼のどのような箇所に玉石垣が多くみられるかを住居表示に基づき担当メンバーを決め、自分たちの眼で確認した。今年の夏は異常な暑さの日が続き、歩いて確認する作業はかなりきついものがあった。

鶴沼の玉石垣は、鶴沼橘、鶴沼桜が岡、鶴沼藤が谷、鶴沼松が岡、鶴沼海岸、本鶴沼に多くみられることが分かり、この6ヵ所を対象に写真を撮り実態をまとめた。

■ 折りから平塚市博物館で玉石垣の調査がされHPで観ることが出来た。7月上旬、同博物館を訪ね学芸員の野崎篤さんから説明を受け、大いに参考になった。

9月例会に野崎学芸員を講師として招き、どのような河川の玉石が使われているかなど話を聞いた。公民館近場の玉石垣を見学し、これらの玉石はどこのものか一緒に見てまわった。ごく一部の観察ではあったが、古いものは相模川系や酒匂川系、新しいものは富士川系の玉石が使われているとのことであった。

<玉石垣プロジェクトメンバー>

大川 久(リーダー 鶴沼松が岡・鶴沼海岸・鶴沼藤が谷一部担当) 有田 裕一・

佐藤 和子・原 雅子(鶴沼藤が谷担当) 小池 清志・吉永 昭男(本鶴沼担当)

十代田 知三(鶴沼松が岡一部) 刀根 恵子(本鶴沼・鶴沼海岸一部担当)

竹内 広弥(鶴沼橘・鶴沼桜が岡・鶴沼松が岡一部担当)

石垣に利用されている玉石調べ

■石垣から流域の地質を知る

石垣、塀や植栽の基礎、玄関前のアプローチの叩きなどには、河原から採取された玉石がよく使われています。このような玉石は、どこから採取されているのか、どこの河川から運ばれたものが多いのかを、市域全域に亘り調査しました。調査は平塚地質調査会の会員有志の協力を得て行いました。その結果をここで紹介しましょう。

玉石から採取された河川を推測するには、玉石の種類と形・大きさが決めてとなります。種類は流域の地質を反映しているので、神奈川県西部（主として丹沢山地）の地質と密接な関係があります。相模川系では、緑色系の凝灰岩類や火山岩類（丹沢山地起源）と、灰色系及び黒系の砂岩や頁岩（小仏山地起源）がほとんどで、ごま塩状のみかげ石（トータル岩・西丹沢起源）や黒色多孔質の玄武岩溶岩（富士火山起源）が幾分含まれています。色調としては余りカラフルではありません。

これに比べて、酒匂川の川原石は、色合いが綺麗で、緑系・白系・黒系の三色混合型です。緑色系は凝灰岩類、火山岩類、変成岩類（丹沢山地起源）であり、白系はごま塩状のみかげ石（トータル岩・西丹沢起源）、黒系は玄武岩溶岩（富士火山起源）で、ほぼ3割ずつ含まれています。相模川も酒匂川も比較的、良く円磨されています。相模川では厚木市上依知より上流から、酒匂川では山北町谷峨～松田町付近で採取されていたようです。

市域を流れる金目川やその上流の水無川の玉石は、全て秦野盆地北部の表丹沢からもたらされたものなので、緑系の凝灰岩類ばかりが目立ちます。火山岩は含まれますが、ごま塩状のみかげ石や、富士溶岩はありません。丸さもかなり角張っています。

丹沢湖を流れる酒匂川の支流である河内川では、西丹沢の緑系の凝灰岩類・結晶片岩と、ごま塩状のみかげ石からなります。丸さは角張っていて金目川・水無川の石に似ていますが、変成を受けて生じた結晶片岩が多量に含まれているという特徴があります。ごま塩状のみかげ石を意図的に排除した河内川系の

石垣では、水無川系と間違えていることがわかり再調査を余儀なくされました。

ところで、玉石調査の途中で、相模川系の玉石だと思っていたものが、どうも相模川ではないのではないかという疑問もわきました。緑系の凝灰岩類の中に、緑色玄武岩が多量に含まれていたからです。よく見ると、白色の石英質の岩石や、粗い砂岩や礫岩も含まれていました。こうした組成の玉石は流域のものではなく、富士川から運ばれてきたものであることがわかり、富士川の現地を調査したところ、山梨県身延町の富士川河原から現在も採取していることがわかりました。巨摩山地や御坂山地は丹沢山地と同様の時代の凝灰岩や溶岩からなり、四万十帯の砂岩や頁岩もあって、相模川と良く類似した組成を示すものでした。相模川系と判断した玉石も再調査となり、最初に相模川系とした大部分が富士川系であることがわかりました。神奈川県川の河川砂利の採取が昭和39年に禁止となってから、現在では大量に富士川の玉石が利用されています。

こうして調べた結果をまとめると、市域の玉石の40%は酒匂川系のものでした。相模川系の玉石は相模川に沿った神田や八幡などに残り、金目川・水無川系の玉石も金目川に沿った地域に比較的にみられます。丹沢湖の水没地域から搬入された河内川の玉石は市全域に20%程度確認できました。何気なく見過ごしている玉石からも、こうした流域の情報を得ることができるのです。

文献：▽平塚市博物館（2000） 街の中の石材 ―地球からの贈り物―
秋期特別展展示解説書.

▽平塚市博物館（2002） 石材ウォッチング―街の中の石材調べ―
平塚市博物館ガイドブック 20.

☆次ページ玉石垣写真の説明は、平塚市博物館のアーカイブ「石材図鑑」
からも一部抜粋し付け加えました。



▲相模川系玉石：厚木市上依知付近産。緑色凝灰岩と砂岩からなる。トータル岩や富士溶岩は稀。



▲水無川系玉石：中里，秦野市大倉産。角のある変成を受けていない凝灰岩のみからなる。

相模川系の玉石は、ほとんどが丹沢山地の凝灰岩類と火山岩類（安山岩や玄武岩等）、小仏山地の砂岩と頁岩からなります。富士溶岩（玄武岩）やトータル岩（みかげ類の中で正長石のほとんどないもの）は一般にはごく稀にしかみられません。従って、全体の色調としては緑系と褐色系です。一般的には径 20～30cm の亜円礫で、長丸形なので小羽積みにします。厚木市上依知より上流の相模川でかつて盛んに採取されました。



▲酒匂川系玉石：広川、谷峨付近産。白・緑・黒の三色が混じっているのが酒匂川系の特徴。丸い。



▲河内川系玉石：御殿 2 丁目、丹沢湖産。結晶片岩～変成凝灰岩とトータル岩類からなるやや角張った礫。

酒匂川系玉石は丹沢山地の凝灰岩類・緑色片岩・火山岩類・トータル岩・富士溶岩の礫からなります。小仏山地の砂岩と頁岩はありません。全体の色調は、緑系＋白系＋黒系となります。径は 30～40cm 大が一般的です。円磨度の高い亜円礫で、長丸形であり、小羽積みにします。酒匂川系玉石は松田町や山北町の酒匂川から採取されたものです。



▲富士系+箱根系玉石：黒色多孔質の富士溶岩と灰色緻密の箱根溶岩からなる。極めて丸い。海浜礫。



▲富士系玉石：土屋,黒色で多孔質の玄武岩溶岩礫。極めて丸い。

富士系玉石は富士溶岩（玄武岩）の円礫のみからなります。円磨度が高く球形です。径は40～50cm大と大きなものが多くみられます。海浜礫の様に見えますが、凝灰岩に比べて均質な溶岩類は円磨度が高くなりやすく、酒匂川の河原から採取されたものがほとんどと考えられます。



▲富士川系玉石：南原1丁目、身延産。凝灰岩・緑色玄武岩・砂岩・頁岩・石英岩とが各種混合する。緑系+灰色系。



▲富士川系玉石：身延産。緑色玄武岩だけを集めた石垣。緑味がとても鮮やか。

富士川系玉石は山梨県南巨摩郡身延町の富士川から採取されたものです。相模川からの採取が禁止されて以来、富士川系の玉石が神奈川県内に多量に入ってきており、古い相模川の玉石が置き換わっています。富士川系玉石には、緑色玄武岩型、硬砂岩型、各種混在型の3つの型があります。

エラー下水蓋

テレビ東京の人気番組「なんでも鑑定団」を見ていると、紙幣の印刷ミスや裁断ミス、コインの刻印ミスや打ち抜きミスのものは、収集家の間で垂涎の的らしくびっくりするような値段が付く。

物を作れば、なんでもエラーは付き物です。ただそれが製品の最終チェックで見逃されたまま完成品と同等に流通ルートに乗ってしまう時に発生するわけだが、貨幣の検査は特別厳しいから、より希少価値が上がるのであろう。

それほど大げさではないが、ここに紹介するのは、藤沢市下水道のマンホールの蓋です。正常のものとエラー蓋の写真を見比べて頂きたい。



正常のデザイン



エラー蓋（上下が逆）

御承知のように市の花、藤の花がデザインされているのだが、中央の市章とバックの藤が上下逆さまなのがお分かりになると思う。

僕が見つけたのは2か所。鶴沼松が岡3丁目9番と10番の境の道（仲通り）に1か所、そこから10番の方への枝道(行止り道路)の奥にもう1か所あります。この鋳型で2枚しか作られなかったとは思えないので、きっとどこか他にもある筈です。ご興味のある方は是非探してみてください。（岡田）

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

4人のつかもと仕事展 1903-2023

会誌 120、121 号にも取り上げた塚本茂画伯は藤沢市美術家協会創立に携わり、鵜沼橋にアトリエを持ち鵜沼の画伯として知られている。

塚本茂画伯の3人の息子さんのうち2人は絵画の道に進み、お孫さんも同じくこの道で励んでいる。

私は小学校に上がる前、鵜沼橋にあった塚本茂画伯のアトリエへ通い「お絵描き」をしたことがある。また三男の実さんとは鵜沼中学校で同期、彼は若くしてパリに渡り絵画活動に勤しんでいる。日本に戻ることはめったになく、クリスマスカードでお互いの近況を伝えている。

その彼の口添えで『4人のつかもと仕事展 1903-2023』を2023年5月に藤沢のギャラリー gineta で開くとの案内状が届いた。

今回の展示会をプロデュースしたのは茂画伯の孫の塚本元さん。本人はデザイナー兼画家として活動している。会場には塚本茂画伯と長男・惇さん、三男・実さん、お孫さんの元さん、親子孫三代にわたる作品が一堂に展示されていた。

会場のギャラリー gineta は知る人ぞ知る画廊で、厳選された作者の作品しか扱わない、と聞いた。狭いながらも落ち着いたスペースが快い。

鵜沼を語る会の会員にも子どもの頃、塚本茂画伯のアトリエに通った方もおり昔を偲んで親子孫三代の絵をご覧になっていたのではないかな。(弥)



塚本元 MOTOKI



塚本実 MINORU

4人のつかもと仕事展 1903-2023

Exhibition of Four Tsukamoto's Art Works
5/20 SAT. - 22 MON. | 26 FRI. - 28 SUN.
11:30 - 18:00 *23(水)・24(木)・25(木)は休廊、最終日は17:00まで

gineta



— 塚本茂 SHIGERU



塚本惇 AKINOBU

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

「鵜沼の玉石垣」を公民館まつりで展示



鵜沼地区公民館まつりは2023年10月14日-15日の二日間、開催された。

鵜沼を語る会は「鵜沼の玉石垣」をテーマに今夏に行った玉石垣の実態調査を撮影した写真を中心に展示した。

来場者にとって身近な鵜沼の景観とあって関心度は高かった。玉石垣を改めて写真で見て「こんなにいっぱい鵜沼にはあるのだ。でも取り壊されるのも多い」と、われわれと同じ思いの人がほとんどであった。「話を聞いて鵜沼の玉石垣に関心を持った、改めて鵜沼の景観の良さを知った。何とか保存したいですね」との意見が多かった。

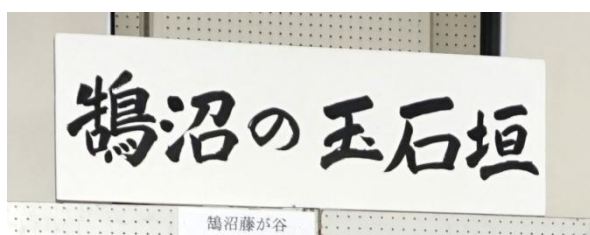
展示だけではもったいないので冊子にしたらどうかなどの意見もいただいた。



「ここ、家の近くだね」



左右 180cm 天地 120cm のパネルを 4 枚、左右 7m20cm のスペースに写真中心に展示



展示作業は 10 月 13 日 10 時から、5 人の会員が手際よく進め 2 時半ほどで終わった。

昨年の公民館まつりの展示作業に協力した同じメンバーなので、展示の要領はすっかりわかっており、ことはスムーズに運んだ。

最後に題字を取り付けると全体が締まった。題字「鶴沼の玉石垣」の墨書は、今回も刀根恵子会員にお願いした。



鶴沼を語る会 学習室 2

A3 サイズのポスターを 3 枚貼った

ちょっと見てみよう

鵜沼にふたつある「松が岡公園」

有田 裕一(会員)

鵜沼に藤沢市立松が岡公園が、ふたつある。

ひとつは鵜沼松が岡3丁目9番地に、もうひとつは鵜沼松が岡5丁目8番にある。松が岡3丁目の公園の南側には昔、ジャパンラインの3階建ての社宅が3棟建っていたが、私の記憶では隣接する松が岡公園もほぼ同じ時期に作られたと思う。



写真1 松が岡公園の表示



写真2 下岡公園の表示

この3丁目の松が岡公園の西側の公園入口には、しっかりした石張りの門柱があり、「藤沢市立松が岡公園」(写真1)とある。

ところが反対側、つまり東側の天金通りに面した入口にはステンレス製の看板があり、「藤沢市立下岡公園」(写真2)と明記されている。

これでは、鵜沼以外のところから初めてこられたひとのみならず鵜沼の住人も、とまどうことだろう。

ここで松が岡5丁目にあるもう一つの「藤沢市立松が岡公園」について見てみよう。小田急線・鵜沼海岸駅から本鵜沼駅へ向かう途中の東(右)側、小高くなったところに、昔の鵜沼の面影をのこした松林に覆われた公園がある。

入り口には「鵜沼松が岡公園の由来」の説明板(写真3)が設けられ、この公園がどのようにして作られたか知ることが出来る。

こちらの松が岡公園は村川堅固(1875~1946年 東京帝国大学教授・西洋史)と長男の堅太郎(1907~1991年 東京大学教授・西洋史)の親子二代が所有していた別荘地であった。

村川堅固は1921(大正10)年に我孫子本陣邸内の離れ屋が取り壊される際に移築した。その後1925(大正14)年に朝鮮に旅行し、そこで見た建物の印象をもとに銅板葺きのユニークな外観の新館を立てた。

1926(大正15)年には鵜沼に土地を購入し同年、別荘を建てた。

この鵜沼の別荘は村川堅太郎に受け継がれたが同氏の没後、我孫子の別荘とともに大蔵省の所管に移り、国の管理のもと「広場」という扱いで藤沢市が借りていた。平成8年藤沢市に所有権が移り「藤沢市立松が岡公園」となった。

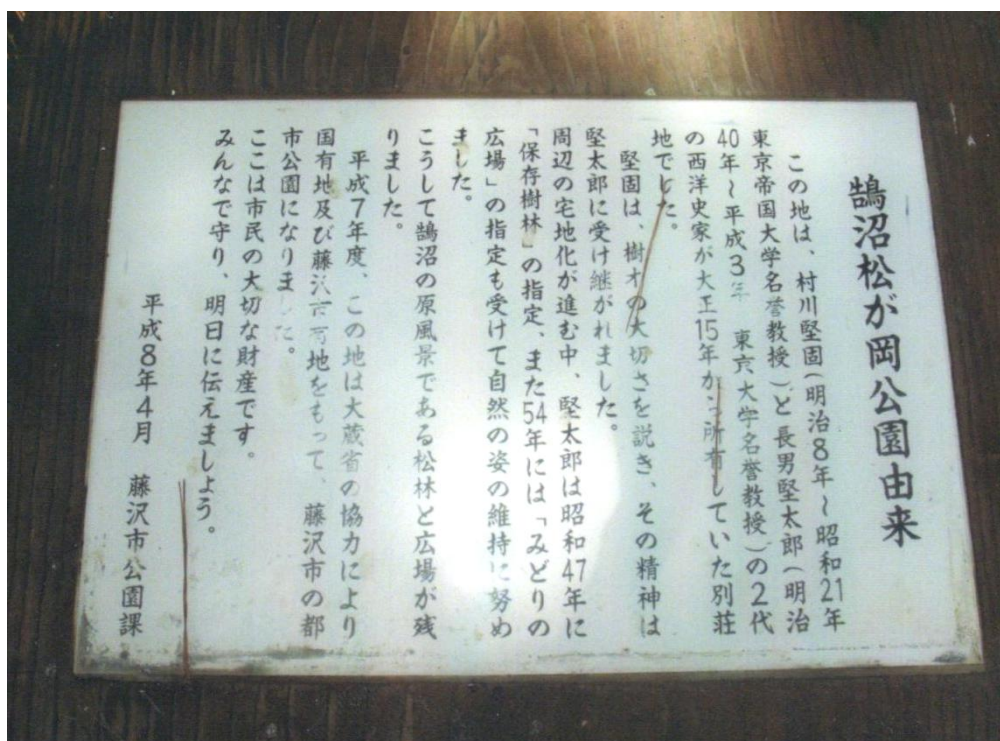


写真3 鵜沼松が岡公園由来の表示板

これに先立ち 1976(昭和 51)年 4 月に、松が岡 3 丁目の松が岡公園は正式に「藤沢市立下岡公園」となった。その後もこの公園の西側の立派な門柱には「藤沢市立松が岡公園」の表示が残っている。この件につき、藤沢市の公園課に問い合わせたところ、このような例は多くあり、松が岡公園という元々の表示は「通称」として扱い、そのまま残しておくとのことであった。

通称と云えば、まさにこの公園の前の道「天金通り」の名称もそうである。正式には「東仲通り」と云い、「仲通り」と共に正式名が忘れ去られそうなのことである。

仲通りは、その突き当たりが「旅館 東家」の正面入口に接する道で、その一本東側の通りが東仲通りであった筈だ。

なぜかと思い調べたところ、地元の消防団(分団 火事の通報は当時、消防署より地元の消防団への方が多かった)へ通報をする際、東仲通りでは新しく鵜沼に住む人たちにとって、また火災現場に向かう若い消防団員にとっても分かり辛いとのことであった。このため通称「天金通り」のどこら辺りと連絡することで通っていたようだ。

(ありた ひろかず)



昔の鵜沼の面影をのこす、松が岡 5 丁目の「鵜沼松が岡公園」

鵠沼を語る会創立 30 周年記念樹の植替え

鵠沼を語る会では2006(平成18)年に創立30周年を記念して、鵠沼公民館に枝垂桜を記念樹として植えた。

ところがここ数年のうちに枯れてしまい、再生するにはどうしたらいいか樹木医にも相談したが、枝垂桜はもともと桜に接ぎ木をして作られるもので、枯れた樹木の周りに出てくるひこばえを育てても枝垂桜にはならない、とのことであった。

そこで、新たな記念樹として「かおり100選」に「鵠沼 金木犀の住宅街」が選ばれていることもあり、金木犀に植え替えた。植替えは公民館紹介の造園業者に頼み4月25日の運営委員会で会員が集まり記念樹植替えの式典を催した。

紅白の幕を張り、新しい記念樹にお神酒をかけ祝った。



— あれから 100 年 —



去る9月1日、公民館南側のオーシャンプロムナード湘南の北入口に設置されている「東久邇宮第二王子師正王碑」の前に東久邇宮家により献花があった。

この日は関東大震災から丁度100年。当時、鶴沼でもほとんどの家が倒壊、その前年度に結成された鶴沼の自警団の努力にもかかわらず（その後その努力

に対して感謝状と菊の紋章入り銀盃を受ける）、この地で47名の犠牲者が出た。

旅館「鶴沼館」の後を実業家で衆議院議員の吉村鉄之助が受け、新築し鶴沼別荘とした。ここに東久邇宮稔彦王の家族が7月19日より滞在し湘南の夏を楽しんでいた。吉村氏は夫人と共に9月1日、午前中に別荘で宮家を接待し、午前11時21分、藤沢発で帰京しようとしていたが、保土ヶ谷の先でこの地震に遭い、横浜高島町の海岸に避難、沖の小蒸気船を呼び寄せ、一命を取り留めた。

鶴沼では師正王と侍女など数名の犠牲者を出してしまい、吉村氏はこの運命を重く見、日本画家の丹阿弥岩吉氏に大震災から逃れる夫妻を描かせた。夫妻の姿は鶴沼で宮家を接待したままの正装であった。吉村氏は自らの郷里の琵琶湖畔の石材と職人を呼び寄せて石碑を建立した。

これから先の記録は私の記憶なので間違いがあればお許し願いたい。この石碑の脇には当時2～3の小さな祠堂が造られていた。この地へ現在のあるニューマンションの建設の時、祠堂の一つは鶴沼伏見の奥の宮の左側に納められているが、この大きな師正王碑は長いこと存在がわからなくなっていた。

鶴沼を語る会の当時の会長、塩沢務氏は、このことを残念に思い長いこと探していたところ、芝白金の寺にあることがわかった。寺側でもどうぞということだったが、さて鶴沼での設置場所の問題が残った。最初、塩沢氏は鶴沼公民館を望んでいたようだが一部の市議会議員の反対もあり、結局、元吉村邸(当時、高橋耳鼻科医院の一番北側)に設置された。

これがオーシャンプロムナード湘南の理解を得て現在に至っている。なお絵画は軸装されて「吉村所蔵」と記された木箱に納められ、現在、横浜市都市発展記念館に保管されている。
(記：有田 裕一)

鵠沼雑記（七）

古志 秋彦

岸田劉生が医師から肺結核と診断されて（誤診だったという説もあるが）鵠沼に転地療養にきたのは大正六年二月だった。最初に住んだのは佐藤別荘のなかの借家で、この佐藤別荘について土方定一は『岸田劉生』（昭和五十一年改訂新版）の年譜で「藤沢市大字鵠沼（旧・字下藤ヶ谷）七三六五番地」と書いている。

そこは江ノ電の鵠沼駅を降りて海の方へ二、三百メートルほど行ったところで、佐藤長四郎という人の「芳藤苑」と名づけられた別荘があった。その敷地のなかの貸別荘には武者小路実篤が一時住んでいて、大正四年に戯曲「その妹」を書いた。（もっともこれには異説もある）劉生は白樺派の作家と交流があったから、鵠沼転地のことも実篤の懇^{しんよう}懇があったのかもしれない。

土方定一は長く神奈川県立近代美術館（鎌倉）の館長をつとめ、当時は江ノ電の鵠沼駅付近に住んでいたから、この辺りは周知の土地であった。したがって改訂版を出したときも十分調査したものと思われる。

それに疑問が生じたのは、劉生の「麗子像」のモデルをつとめた娘の麗子が、その著書『父 岸田劉生』のなかで「はじめての家は海に近くて」と書いているからであった。ここからだと海までは一キロもあって、子供の麗子の脚で「海に近い」とは到底思えなかった。

麗子と幼馴染で、同じく劉生の「村娘於松」のモデルとなった川戸マツさん（当時は葉山姓）は明治四十四年生まれ、現在もご健在で記憶は鮮明、足取りもしっかりしておられる。そこで平成十五年五月、数人の仲間と一緒に鵠沼海岸の別荘地跡を歩いてもらった。

このときの記録は、地方史研究の会誌『鵠沼』87号に掲載されているが、マツさんの証言で、「当時の鵠沼郵便局の海寄り」に劉生が住んだ別荘があったことがはっきりした。ここも佐藤長四郎氏の別荘であったため混同されてきたようである。現在の地番でいうと「鵠沼松が岡三丁目二十三番」付近である。ここからだと海まで五分ほどで行ける。

*

佐藤別荘に四か月住んだあと、北向きの窓がないとの理由から劉生は近くの松本別荘に移ることになる。

二つの佐藤別荘のちょうど中間にあたり、ここに東京の木綿太物商の松本直祐という人の「陽松苑」と呼ばれる別荘があった。二千坪近い敷地の中央に私道が通っていて、その突き当りの小高い砂丘の上に松本氏本人の別荘があり、私道の左右に数軒の貸別荘が建っていた。敷地内は同一番地で全部三七三五番地、現在の「鵠沼松が岡四丁目七」と「四丁目八」である。

劉生が借りた家は、鵠沼で唯一の二階建て西洋館が付属していて、その特徴のある外観から「火見櫓」と地元では親しまれていた。赤い三角のとんがり屋根の西洋館は湘南の風景のなかで際立っていた。「鉛筆を立てたようなノックの建物だった」と今でも記憶している人もいる。芥川龍之介も「煙突みたいな赤塗りの洋館、前には岸田劉生がゐたよし」と大正十五年八月九日の日記に書いている。この西洋館は関東大震災で傾いたが倒壊を免れ、昭和三十年代まで残っていた。

この洋館の一階を劉生はアトリエとして使い、二階を書斎兼寝室にあてていた。北向きの窓のほか東側と南側にも窓があった。劉生は東と南の窓を布で塞ぎ、北側から入る光線だけで制作した。鵠沼時代の劉生にとって最も制作意欲の充実していたときで、「麗子像」シリーズはスケッチを含めて百点以上が残された。

麗子像とともに、劉生のもう一つのテーマとなったのが、一連の「鵠沼風景」であった。現在の鵠沼からは想像もできないが、牧歌的な麦畑や松林や砂丘が描かれ、玉石を積み上げた石垣とともに、鵠沼の特徴がよく捉えられている。正確に調べたわけではないが、鵠沼風景は三十点ほどが確認されている。このうちの半数以上の十八点に描かれているのが、赤茶けた「小高い丘」で、これがどこであるかについては、これまで二つの説があった。

一つは「藤沢の方の山」という説で、これは麗子の関東大震災のときの記憶がもとになっている。

「松本さんの山へ逃げようといって、麗子おいで、と父は呼ぶ。母はあんな低い所じゃだめですよ、といている。実際それは山などというものではなく、ただ、小高い所に松が生えているに過ぎないものなのだ。そして結局風景のなかでよく描く藤沢の方の山をめざして逃げるようになった」

(岸田麗子『父 岸田劉生』)

この関東大震災で洋館が壊れたため、劉生一家は鵠沼を離れることになる。麗子はこのとき満九歳だったから「藤沢の山」と思い込んでいたのも無理はない。

神奈川県立近代美術館の「生誕百十年記念 岸田劉生展」のカタログでも断定

はしていないが、どちらかというと、この説をとっている。その「窓外夏景」の解説には次のように書かれている。

「松本別荘の二階の劉生が書斎兼寝室としていた部屋から見える風景。鶴沼時代の風景画には、この部屋からの眺めのものが多い。横堀角次郎によれば、この部屋の窓は北向きにあったというから、藤沢のほうを見ているのであろう。麗子がその著書『父 岸田劉生』のなかで、劉生の声が山彦になって帰ってきたと語っている藤沢方面の山は、この右手の小高い丘のことをいっているのかもしれない」

＊

ところで、もう一つ別の証言がある。それは地元鶴沼で育った三田文学の作家、今井達夫の回想録「鶴沼物語」である。少し長いが、そのまま引用してみる。

中学生時代こんな経験をわたしは持っている。劉生－椿（筆者注＝椿貞雄のこと。劉生と同じ草土社に所属、劉生の鶴沼転居とともに自分も鶴沼の八軒別荘に移り住んだ）の通路の途中に小さな三角の水田が残っていた。その水田の端で宿題の水彩画を描いていると、あとからやってきた劉生がわたしと並んで絵具箱をひらいた。わたしは彼がどんな風に描くか興味を抱いて注視していたが、途中で声をかけずにいられなくなった。

「岸田さん、あすこの電信柱がないじゃありませんか」
すると度のつよい近眼鏡を光らせてわたしを見た劉生の口から、たったひと言が力づよく洩れた。

「いらんものは、いらん」
そのひと言は、雷のようにわたしのなかを、走りすぎた。そのいらない電柱とは――午後の日射しの当たっている片瀬の山を描こうとすると、すぐ近い位置にあって邪魔になっていたそれのことであった。（今井達夫「鶴沼物語」）

この三角の水田の端で劉生が描いた風景は、おそらく「早春之一日」と題された絵であろう。もちろん邪魔な電柱は一本もない。そして問題の赤い山肌をみせた「小高い丘」がみえている。今井達夫は小学生のころから鶴沼に住んでいたから「片瀬の山」を「藤沢の山」に見誤ることはまずないと思われる。
「片瀬の山」とすると、その候補はしばられてくる。それは東一キロほど先にみえた片瀬丘陵で、その一番北端に「駒立山」という六九・二メートルの山がある。

これが劉生の絵の「小高い丘」であろう。そのすぐ右にも赤茶けた山が描かれているが、それは土地の人が「赤山」と呼んでいる山に相当する。

ともに関東ローマ層が削り取られた山肌をむき出しにしている。これは明治三十年代に江ノ電を敷設するために土を取った跡で、いまではすっかり緑に覆われているが、大正期には劉生の絵にみられるように、赤い山肌をみせていたのであろう。

＊

「松本さんの山」は麗子もいうように「ただ小高い所に松が生えている」だけの、せいぜい二、三メートル程度の砂丘だった。この砂丘は小田急の鶴沼海岸駅付近から北東に延びて鶴沼砂丘列の一つを形成していた。

その砂丘のなかほどに松本氏の別荘が建っていた。大正七年秋ごろ、そこに一人の外国人がやってきた。『劉生日記』に十三回も出てくる「シュテルンベルク」という名のユダヤ系ドイツ人だった。土地の人からは「シュテルン」と親しまれた。

シュテルンは大正二年、東京帝国大学で法制学を講ずるために招かれたお雇い教師だった。教え子に田中耕太郎、星島二郎、川島武宜らがいる。田中は東大の老事務官の言葉を引いて「東大法学部に今まで外国人であれほど学者らしい人は来たことはない」といい、その学風は「哲学的、歴史、社会学的であって、ただ法典の注釈といったような従来の法科の諸教授の学風とは全然違っていた。何だか本当に学問らしいものがそこにあるような気がした」と書いている。田中は書生兼通訳として、二年間寝食を共にした。

しかし、五年後に東大の方針が変わり、契約満了でシュテルンは東大を解雇される。シュテルンが鶴沼にきたのはその後のことらしく、法科で彼に学んだ高瀬彌一や田中耕太郎の斡旋があったのではないだろうか。田中耕太郎も彌一と一高、東大を同じ時期に過ごしているから、この推測は根拠がないわけではない。

松本別荘での生活は長くはなかったようだ。『劉生日記』によると大正九年七月二十二日に「椿(貞雄)と横堀(角次郎)と三人で海水浴に行く。ステルンベルヒに会う。借家のことで弱っていて少し気の毒だった」とあるのは、このことと関係があるのかも知れない。シュテルンが移った先は松本別荘からやや海寄りの借家で、昭和の初めごろまでは、その付近を転々としながら慶應、中央、法政などの私大で講師をつとめていた。

昭和四年ごろ、ドイツの友人がドイツ国内の大学へ最後の働きかけをする。しかし、ヒトラー政権下で、ユダヤ人の公民権を剥奪するニュルンベルク法が成立、

シュテルンは祖国に帰る夢を絶たれる。さらに不幸が追い討ちをかける。長男のローベルトもドイツを逃れるように父を頼って来日するが、病を得て日本滞在中、三十五歳の若さで亡くなってしまうのである。

日本も急速に、日中戦争、第二次世界大戦へと傾斜していく。「戦争の始まる前には既に辻堂の浜見山に移っていた」と高瀬笑子さん(現ミネソタ大学名誉教授)は『鵜沼断想』で回想している。笑子さんは、そこへドイツ語を習いに通った。シュテルンは戦前、家計が苦しくなっても個人的な援助や家庭教師を「学者の品位にかかわる」と引き受けることをしなかったが、戦後の混乱期に、そう勝手をいってはいられなかった。

「帰りは辻堂へ戻らずに、芦や葦の生えているところを通り、日之出橋を渡って小田急の鵜沼海岸駅へ出た。ステルンベルヒは大抵、日之出橋まで送ってきてくれたが、時には鵜沼銀座まで送ってきて買物をして帰ることもあった。店の人もなつかしがつて『ステルン、ステルン』と呼ぶ。魚屋の小父さんや、八百屋の小母さんが『ステルン、古くなったな』などという『あんまり古くて屑屋も買わない』などと日本語で冗談を飛ばしていた」

(高瀬笑子『鵜沼断想』)

戦後、生活が苦しかったシュテルンの面倒をみたのは最高裁長官となった田中耕太郎だった。田中は藤沢市の生活保護と医療保護の手続きをとり、最後は目白の聖母病院に入院させた。長男が亡くなった同じ聖母病院でシュテルンは昭和二十五年四月十七日、七十二歳で生涯を閉じた。二日後の朝日新聞は「大正二年東大に招かれて来日、わが法曹学界の恩人として田中最高裁長官ら多くの門弟をだした」と報じた。戦後の限られたスペースの紙面としては異例の扱いであった。

編集注：本稿は第3次『同時代』20号(2006年6月号)に掲載された。

於松：川戸マツさんは平成25年1月31日101歳で逝去された。

シュテルンベルク：『鵜沼』80号、高三啓輔会員による『分かっていた「ステルンさん」の横顔・日独二人の法学者の研究から』に詳しい。

辻堂浜見山の住まいは、今の辻堂市民センターのあたりという。

解説：「鵠沼雑記シリーズ」が掲載された『同時代』について 岡田哲明

『同時代』は、エッセイ、評論、詩、研究などの同人誌である。フランスの“Les Temps Modernes”誌や“La Nouvelle Revue Française”誌に倣い、1948年に哲学者矢内原伊作、フランス文学の宇佐見英治が『同時代』を創刊したが7号をもって中断した。（第1次）

その後、1955年、上記二人に評論家宗左近、国文学安川定男、ドイツ文学吉村博次、フランス文学斎藤磯雄、曾根元吉が参加して第2次『同時代』を刊行したが、1993年、矢内原の死によって終刊した。同人には小島信夫、串田孫一、辻まこと、有田忠郎、山崎栄治、伊藤海彦らがいた。

3年間のブランクを置いて1996年、第3次『同時代』が発足した。編集長にドイツ文学富田裕、編集委員にフランス文学清水茂、ロシア文学川崎浹、英文学和田旦、日本文学影山恒男、建築家詩人長尾重武、詩人布川鶴、北岡淳子、方喰あい子、俳人高橋博夫、美術史家岡村嘉子の11人に、加えて英文学森常治、アメリカ文学堀内正規、印度学森本素世子、ロシア文学工藤正廣、ドイツ文学保坂一夫、詩人日高てる、作曲家藤井喬梓ら28人が同人であった。2016年12月、第3次『同時代』第41号を持って一旦活動を中断した。

フランスの彫刻家アルベルト・ジャコメッティ、詩人イヴ・ボヌフォワなど同人との親交を通じ海外のエッセイや詩が同人の翻訳でいち早く掲載されることで知られていた。

2020年2月、第4次『同時代』が創刊。川崎浹を編集代表に、編集を小野民樹、中村邦生、長尾重武、福井信彦が務め、年2回の刊行がなされている。

（Wikipedia、同時代 HP より要約）

古志秋彦（本名：伊藤聖「鵠沼を語る会」元会長）は第2次『同時代』のころからの同人であった。第3次に入ってから創刊号からほぼ毎号に詩や文を発表してきた。2005年脳梗塞を発症、ステント手術をうけ回復したが、徐々に体調を崩して第30号に発表した詩「若くして逝きし友へ」が最後の投稿となった。

詩集には『海の原点』1977年、『ある空間』1982年、『パスカル頌』1991年、『数学科学生』1995年、『ルベグ積分序説』1999年、『不完全性定理』2003年、『リーマン予想』2010年の7冊がある。旧制東京高校数学科、東大仏文学科卒

朝日新聞記者。数式が並んだ詩が「詩といえるか」と詩壇で議論を呼んだ。

ペンネームの由来について『リーマン予想』あとがきに「わたしの筆名『古志』は『越の国』から由来していることにふれておく」と書いている。



鶺鴒地区の通称地名(第 0013 話)

渡部 瞭

鶺鴒地区には集落名、小字名、住居表示、公的道路や交通機関に関する駅名やバス停名以外にも、各種のいわば非公式の地名が多数見られる。

成立年代別に分類すると、以下の4段階に区分できる。

- 1) 江戸時代以来の伝統的なもので、現在ではほとんど用いられないもの
- 2) 明治・大正期の鉄道開通から別荘地開発に伴って生まれたもの
- 3) 関東大震災復興期から戦前の住宅地化で生まれたもの
- 4) 戦後の都市化で生まれたもの

江戸時代以来の伝統的な地名			
区分	地名	よみがな	備 考
場所名	車田	くるまだ	由来には諸説あり。小字名だが、引地に含まれる場合がある
	奈須野原	なすのがはら	那須与一が神明宮に寄進したことにちなむか
	金堀塚	きんくつづか	金が埋まるとの伝承があった塚。空乗寺の山号となる1879(明治12)年人骨が出土。首塚が建てられた
	ビッタリ		由来は未調査
	六本松	ろっぽんまつ	古戦場
	一本松	いっぽんまつ	東海道本線の踏切名に残る
	池袋	いけぶくろ	清水と荻田の間。袋地名だが知る人は少ない
	茂兵衛台	もえんだ	警察署東の共同墓地のあるところ 近所に茂兵衛の家があった

	新田山	しんでんやま	新田集落南方にある鵜沼地区最高点の砂丘 海拔約 25m
	高砂	たかすな	藤沢駅南方の砂丘列。江ノ電現石上駅の 旧停留所名
	河岸	かし	由来は未調査。港が置かれた
	石上 渡船場	いしがみ とせんば	江乃島道片瀬川の渡船場
	川袋	かわぶくろ	片瀬川の西方への曲流で生じた袋状地形 袋地名
	ミズアカ		由来は未調査。砂丘間低湿地で地下水位が 高いからか
	三角山	さんかくやま	原南部の小砂丘。知る人は少ない
	桃座山	ももざやま	堀川西方の小砂丘。知る人は少ない
	高砂	たかすな	標高 18.4m の砂丘。子供の砂滑りの遊び場 だったという
	地藏袋	じぞうぶくろ	引地川の西方への曲流で生じた袋状地形 袋地名
	紋十郎 河岸	もんじゅうろう がし	由来は未調査
	大曲	おおまがり	通説では海岸通りを塞ぐようにあった砂丘列 を人力車が上れないので、仲通りまでの曲が り角だというのが、片瀬川の屈曲点を示す地名 と思う
	松波	まつなみ	由来は未調査。交差点の名になっている 案外新しい地名かも
交 通 関 係	鰯干場	やしば	地引き網漁場。干鰯(ほしか)の干し場
	東海道	とうかいどう	五街道の第一。江戸初期に整備され一級国道
	引地橋	ひきじばし	東海道の引地川に架かる土橋だった。4 か村 の共同管理
	万福寺 通り	まんぷくじ どおり	古刹万福寺門前の通り

仏堂道	ほとけどうみち	一本松から普門寺観音堂(大東公民館)に通ずる通り
江乃島裏街道	えのしまうらかいどう	橋の辻から石上渡船場に至る道
綱撚り場	つなよりば	鵜沼中学校南側の道。直線部が長く、地引き網の綱を撚った
新田道	しんでんみち	新田と納屋を結ぶ道 地引き網に通う道だった
本道	ほんみち	中井と堀川を結ぶ鵜沼村のメインストリート
浜道	はまみち	堀川三叉路から竜宮橋を超えて地引き網漁場に向かう道

明治・大正期の鉄道開通から別荘地開発に伴って生まれたもの

場所名	百両山	ひゃくりょうやま	単なる松山が百両の高値で買い取られたことからといわれる
	鵜沼海岸別荘地	くげぬま かいがん べっそうち	大給子爵の所有地を伊東将行らが道路整備し、クロマツを植樹して開発 販売した日本初の大型別荘分譲地
交通関係	中学通り	ちゅうがくどおり	旧鎌倉道の一つ。湘南中学開校に伴い整備され、現在もこう呼ばれる
	上村橋	かむらばし	引地川を越え、羽鳥村と結んだ 昔は川中島があり、東側の橋名
	清水橋	しみずばし	引地川を越え、羽鳥村と結んだ
	石上通り	いしがみどおり	旧江乃島道の石上の呼び名
	仲通り	なかどおり	鵜沼海岸別荘地開発の基幹線といわれる 東屋門前に至る
	東仲通り	ひがしなかどおり	現在の基幹線。天金料理店が面するので 一般に天金通りとも呼ばれる
	海岸通り	かいがんどおり	江ノ電鵜沼駅と鵜沼海岸海水浴場を結ぶ メインルート
	藤ヶ谷橋	ふじがやばし	鵜沼松が岡中央の湿地から片瀬川に注ぐ細流に架けた海岸通りの橋

	肥上げ道	こえあげみち	辻堂村の農民が片瀬の旅館街の下肥を運ぶため公用地に敷設した道
	日の出橋	ひのでばし	肥上げ道が引地川を越える橋
	一の橋	いちのはし	公民館前の道が古川(堀川排水路)を越える橋
	鵜栄橋	こうえいばし	古川を超えて商店街と海水浴場を結ぶ橋
	鯉取橋	こいとりばし	肥上げ道が古川を渡る橋
	竜宮橋	りゅうぐうばし	浜道と鰯干場を結ぶ引地川の橋
	片帆橋	かたほばし	海水浴場入り口の古川(時には引地川)に架かる橋
関東大震災復興期から戦前の住宅地化で生まれたもの			
場所名	高瀬住宅地	たかせ	高瀬彌一が大正後期に開発分譲した定住住宅地。海軍軍人が購入
	宮崎町	みやざきちょう	新田山の南方の砂丘一帯を占めた宮崎寛愛邸と周辺
	高松山	たかまつやま	高松分家所有地の砂丘。モモ畑から分譲別荘地となった。拙宅がある
	富士見住宅地	ふじみ	昭和初期に川袋低湿地を埋め立てた住宅分譲地。開発者不詳
	小川町	おがわちょう	現上岡バス停付近の砂丘を崩した住宅地 砂は川袋埋め立てに使用
	柳小路住宅地	やなぎこうじ	1922(大正 11)年、中根氏はじめ 3 軒が別荘を構え、開発が始まる
	松島苑住宅地	まつしまえん	高瀬彌一の親類山口寅之輔が大正末～昭和初期に開発分譲
	堀川田	ほりかわだ	鵜沼堰完成によって耕地整理が行われた鵜沼地区最大の水田地帯
交通関係	橋通り	たちばなどおり	藤沢駅南口と高瀬彌一邸正門を結ぶ道 商店街になった
	大東道	おおひがしみち	一本松踏切から南下する新道 1927(昭和 2)年完成。記念碑がある
	上郎通り	こうろうどおり	上郎新二邸前に通ずる道。高瀬通りの続き

交通関係	高松通り	たかまつどおり	高松山東麓の道。上郎通りの続き
	山口通り	やまぐちどおり	上岡から松島苑を経て江ノ電鵜沼に向かう道。高砂通りとも
	原町通り	はらまちどおり	本鵜沼駅から堀川三叉路に向かう道
	熊倉通り	くまくらどおり	高瀬彌一の鵜沼新道最南部区間。熊倉氏は証券業者とか
	一木通り	いちきどおり	藤沢町長 一木與十郎邸前を通ることから1931(昭和6)年に命名
	学園通り	がくえんどおり	道路は明治期からある。1933(昭和8)年開校の湘南学園通学路
	鵜沼銀座	くげぬまぎんざ	かなり古い道だが小田急開通により商店街として発展した
	湘南遊歩道路	しょうなんゆうほどう	県の国際観光地化政策の手始めに敷設された県道片瀬大磯線の通称
	境川橋	さかいがわばし	旧片瀬県道が片瀬川を渡る橋
	大平橋	たいへいばし	大野守衛町長と開発者平沼覚治郎の頭文字から命名された
	作橋	さくばし	鵜沼銀座から西へ進み、八部公園前から引地川を渡る橋
	鵜沼橋	くげぬまばし	湘南遊歩道路が引地川を渡る橋。4車線に拡幅された。
場所名	渚橋	なぎさばし	湘南遊歩道路が古川を渡る橋。4車線に拡幅された。
	戦後の都市化で生まれたもの		
	第一蓮池	だいいちはすいけ	鵜沼高校グランド脇に残された、かつて7つあった蓮池の残骸
	第二蓮池	だいに はすいけ	桜小路公園の池。外来生物の宝庫

交 通 関 係	八間道路	はちけんどうろ	大東から引地川まで、県道予定地が先行敷設された砂利道
	湘南新道	しょうなん しんどう	1961(昭和 36)年開通した県道 30 号 戸塚茅ヶ崎線の愛称
	鵠沼新道	くげぬま しんどう	1963(昭和 38)年開通した市道鵠沼海岸線の 愛称。鵠沼新道は他にも
	ファミリー ー通り		藤沢駅南口から石上通りに向かう商店街 1996(平成 8)年に命名
	マリン ロード		鵠沼銀座のモール化により 1992(平成 4)年 に公募で改称
	新川名橋	しんかわなばし	県道 32 号藤沢鎌倉線が片瀬川を渡る橋
	奥田橋	おくだばし	新林小学校通学路として片瀬川に架けられた
	新屋敷橋	あらやしきばし	片瀬山住宅地に上る道路が片瀬川を渡る橋
	境橋	さかいばし	江ノ電鵠沼駅東方の片瀬川の橋 欄干にクゲヌマランのレリーフ
	高山橋	たかやまばし	東海道本線北側の道路が引地川を渡る橋
	富士見橋	ふじみばし	湘南新道が引地川を渡る橋 パナソニック撤退で富士山が見える
	長久保 みどり橋	ながくぼ みどりばし	長久保都市緑化公園に向かう引地川の歩行 者・自転車専用橋
	稲荷橋	いなりばし	鵠沼新道が引地川を渡る橋 そばに伏見稲荷があることから命名

鵜沼地区の通称地名

凡例

- 江戸時代以来の地名 (Blue)
- 明治・大正期の地名 (Red)
- 震災～戦災期の地名 (Green)
- 戦後の地名 (Yellow)

57

「鵠沼を語る会」活動の記録

(令和4年12月～令和5年11月)

令和4年

12月例会

12月13日(火) 10時～12時 学習室① 14名出席

会誌『鵠沼』122号配付 140部作成 贈呈49部

・カラーページコピー取り：11/24 ・印刷：11/28 大川/小池/竹内/田中/
吉永 ・製本：11/29 井伊/大川/岡田/笠羽/貴田/熊川/小池/佐藤/杉山/
竹内/田中/刀根/原/吉永 14名)

・新年会2013 出席者最終確認 お話：フリートーク

12月運営委員会

12月20日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

令和5年

1月例会・新年会

1月10日(火) 11時30分～13時30分 12名出席

新年会を兼ね藤沢・「さかな家」で開催。今回はビンゴゲームを楽しんだ

会費：¥3,000 幹事：田中会員 商品購入：田中/刀根/渡部会員

1月運営委員会

1月31日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

・枝垂桜に替わる金木犀、4月に植栽。シーランド造園に頼む。見積¥58,300

2月例会

2月14日(火) 10時～12時 学習室① 16名出席

・新年会報告 お話：「俳句についてー芥川龍之介と俳句など」神谷章夫会員

2月運営委員会

2月28日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

3月例会

3月14日(火) 10時～12時 第1談話室 13名出席

・歴史散歩：4月例会時を史跡めぐり・遊行寺に充てる。企画・ガイド担当の小池会員より説明。当日引率担当は田中(L)、大川、田中会員に依頼する。

・創立30周年の記念樹・枝垂桜に替わり「金木犀」を植えることを決定

お話：芥川龍之介「蟹気楼」刀根恵子会員による朗読

3月運営委員会

3月28日(火) 10時～12時 第1談話室

7名出席

4月例会

4月11日(火) 歴史散歩「遊行寺めぐり」 10時に小田急藤沢駅改札口集合
(直行の場合、遊行寺大銀杏) 観覧料：¥10,000

14名出席

4月運営委員会

4月25日(火) 10時～12時 第1談話室

7名出席

創立30周年記念樹植替え。紅白の幕を張り金木犀にお神酒をかけ祝った

第37回定期総会 5月例会

5月9日(火) 10時～12時(総会：～10時30分) 文化活動室 13名出席

総会司会：田中会員 総会議長：有田裕一会長 議案書・会則・会員名簿配付

<総会議事録>

第一議案 令和4年度事業報告

- 会誌『鵠沼』第122号 令和4年12月1日発行、140部作成
配付：会員74部 贈呈49部 頒布12部
- 公民館まつり 「楷の木を語る」のテーマで植樹した楷の木の現状を展示
- 史跡めぐり 今年度は実施せず。令和3年度は「龍口寺」めぐり(3月例会) 令和5年度は4月例会日に「遊行寺」めぐりを実施
- 新年会 2023年1月10日(火)「さかな家」で開催。12名が参加
- 「楷の木プロジェクト」(2021年6月例会) 記念樹として寄贈してきた楷の木の成長ぶりや周りの環境について調査し、10月の公民館まつりで展示発表
- 例会/総会/運営委員会はコロナ禍の影響なく予定通りすべて開催

第二議案 令和4年度収支決算報告

収入：53万6,314円 支出：8万7,754円 次年度繰越金：57万7,464円

第三議案 令和5年度事業計画

- 公民館まつり出展：鵠沼の玉石垣を調査しパネル展示で報告する
- 史跡めぐり：遊行寺(4月11日) 秋にもう一か所との要望があったが要検討
- 会誌制作第123号：12月に発行予定
- 調査・研究：鵠沼の玉石垣について現状調査。玉石垣はいつ頃からつくれたのか、どこの河川の玉石か、その運搬方法はなど
- その他：活動を進めてゆくなかで事業計画として相応なものと考えられるテ

ーマが提案された場合、活動内容ならびに経費について検討し順次追加

第四議案 令和5年度収支予算

創立30周年記念樹の植替え(金木犀)費用5万8,300円を計上

第五議案 令和5年度役員について

20年間にわたり会長職にあった有田裕一会長(途中4年間は内藤喜嗣会長)の辞任申し出に伴い、会長・副会長の職を代表・副会長と改め、代表：竹内広弥 副代表：大川久を選出した。併せて監査：渡部かほり、会計：大川久を再選。なお役員の名称変更に伴い、会則第7条(役員)を一部改訂(会長・副会長⇒代表・副代表)、令和5年5月9日より施行する

☆これらすべての議案は出席した全会員の拍手を以て承認された

5月例会 お話：「江島神社と江の島」(佐江衆一)を刀根恵子会員が朗読

5月運営委員会

5月30日(火) 10時～12時 第2談話室 4名出席

6月例会

6月13日(火) 10時～12時 第3談話室 13名出席

・鶴沼市民センター/公民館等施設改築の件 ・会誌バックナンバーについて

お話：鶴沼郷土資料展示室『引地川と鶴沼一川の歴史と自然・暮らし』を見学

6月運営委員会

6月27日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

7月例会

7月11日(火) 10時～12時 学習室① 11名出席

・平塚市博物館訪問報告 7月4日10時30分、有田/大川/小池/佐藤/十代田/竹内/田中会員が参加。野崎篤学芸員の説明を受ける

・玉石垣プロジェクトの進め方 ・公民館まつり参加について

・会誌バックナンバー(No.98/101/104/105/107/108/113/120)を配付

お話：「江の島マイアミビーチの夏」(佐江衆一)を刀根恵子会員が朗読

7月運営委員会

7月25日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

8月例会

8月8日(火) 10時～12時 学習室① 10名出席

・玉石垣プロジェクト中間報告 ・公民館まつりと会誌123号について

8月運営委員会

8月29日(火) 10時～12時 第1談話室 3名出席

9月例会

9月12日(火) 10時～12時 第3談話室 11名出席

・玉石垣プロジェクトと公民館まつりについて

お話：平塚市博物館の野崎篤学芸員が玉石垣の調査について映像を交えて説明
近場の玉石垣(国分邸、旧赤別荘など)を野崎学芸員と一緒に調査した

9月運営委員会

9月26日(火) 10時～12時 第1談話室 4名出席

10月例会

10月4日(火) 10時～12時 学習室① 13名出席

・公民館まつりについて どのような展示をするか映像を交えて説明

お話：「遊行寺」(佐江衆一 散歩名人 in 藤沢)を刀根恵子会員が朗読

■第47回鵜沼地区公民館まつり

10月14日(土)、15日(日)

「鵜沼の玉石垣」を展示、来場者にとって身近なテーマだったこともあり関心度が高く好評だった

10月運営委員会

10月31日(火) 10時～12時 第1談話室 4名出席

11月例会

11月14日(火) 10時～12時 第1談話室 15名出席

・公民館まつり「鵜沼の玉石垣」展示報告、出席者からの感想

・新年会2024の案内並びに希望申し込みを受ける

1月9日(火) 11:30～ 「さかな家」 会費：¥3,500 幹事：田中会員

・楷の木1鉢を明治中学に寄贈(渡部かほり会員保管分)

お話：鵜沼地区の通称地名について一有田会員の説明後、皆が知っていることを話し合った。説明全体にプロジェクターで映像を付け加えたのが好評

11月運営委員会

11月28日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

<会員>41名 2023年12月1日現在

入会：松本芳子(8月8日) 退会：栗田淳一(11月4日) 物故：榛葉昭市(3月)

編集後記

■公民館まつりの『鵠沼の玉石垣』展示会場には多くの来場者があり、好評だった。二日目の朝は激しい雨。それでも、かなりの人出があった。翌日は一転して秋晴れ、海辺に出ると冠雪した富士山がくっきりと姿を見せる。その足で公民館に寄ると植樹した金木犀が黄色い花をつけ、ほのかな香りがあった。（弥）

■4月末に記念樹の植替えをしてから雨の降らない猛暑日が続いたが、連日の水遣りの甲斐あって、しっかり根付いたようです。何処からともなく漂って来る甘い香りが傍を通る人を振り向かせている。香りが強すぎてご近所様から嫌われないように「鵠沼の香り—金木犀」（吉永 昭男）

■今年の公民館まつりでは、大川会員が提唱した「鵠沼の玉石垣」調査の展示をした。生まれる前からの当たり前の景色、日常生活の中に常にある景色、一度も見入ったことはなかった。玉石垣の歴史、玉石の種類などを教わり、これからは鵠沼の風景をみる度に公民館まつりの思い出が蘇るだろう。（有田 裕一）

■この夏の猛暑で皆様、玉石垣の写真撮影は大変だったと思います。私は早朝の犬の散歩で助かりました。犬の名前は「イチゴ」ちゃん。好奇心旺盛で本鵠沼から境川沿いの藤が谷まで色々な道筋を知っており、様々な家の玉石垣の写真をとる手助けをしてくれました。公民館まつりが近づき、展示する写真を選び始めた9月上旬、「イチゴ」は亡くなってしまいました。今回の展示の手助けをしてくれた「イチゴ」ちゃんに大いに感謝しています。（大川 久）

■このお話(玉石垣)を耳にした時「あっ、7丁目のあそこで見た」と行ってみると思った通り。炎天下スマホとメモ帳を持って7丁目から本鵠沼方面に向かうとあるある、○ □ カラフルな石で築き上げられている。訳もなく石垣に引き込まれ、かなりの枚数を撮りまくった。その途中、石垣の家の主と話すチャンスがあり、なんと60年ぐらい前に山北奥の中川温泉近くの川原まで業者さんと取りに行ったとの貴重なお話を聞くことができた。炎天下の贈り物？（刀根 恵子）

■刀根さんの美しい墨字『鵠沼の玉石垣』の見下ろす石垣の写真の数々に見学する人達は釘付けになり、丁寧に見学していた。中には写真の玉石を指しながら、「時々ブラシで磨くのよ」とこそこそ囁くようにする人も見られ石垣愛の深さに感動した。願わくば写真を冊子で纏まってもう一度見たいものです。（原 雅子）

■かつての鵠沼の広い別荘地は住宅街として細分化され、人々が多く集い住む町として一層の活力が生まれる反面、「松と玉石垣」としての風情はどうしても薄らいでいく。これも時の流れであって、これからは思いのつまった玉石垣がどのような形で残されていくか見守っていききたい。（佐藤 和子）

『鵜沼』 第 123 号
令和 5 (2023) 年 12 月 1 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>